

## 症 例

## 虫 垂 癌 の 一 例

昭和39年12月14日 受付

信州大学医学部丸田外科教室  
沢 田 久 雄A Case of Carcinoma of the Appendix  
Hisao Sawada  
Prof. Maruta's Surgical Clinic, Shinshu University

虫垂に発生する悪性腫瘍は稀で虫垂癌の報告例は本邦でも欧米でも決して多くない。著者は盲腸周囲膿瘍の診断の下に開腹したところ虫垂に原発した腺癌であった一例を経験したので報告する。

## 症 例

患者：北〇すみ〇，女性，77才

初 診：昭和36年3月21日

主 訴：右下腹部痛

家族歴：父が食道癌で死亡している以外特記すべきものはない。

既往歴：42才の時腹壁蜂窩織炎に罹患した以外著患を認めない。

現病歴：昭和35年9月突然腹痛を訴え、同時に38.5°Cの発熱を見たが、嘔気、嘔吐等はなかつた。某医の診察を受けたところ右下腹部の腫瘤を指摘され、盲腸周囲膿瘍として抗生物質の投与をうけた。腫瘤はその後漸次縮小し、約1ヵ月後には腫瘤は殆んど触れなくなり、その後何等の愁訴もなく経過した。昭和36年2月になり再び発熱及び右下腹部の鈍痛と軽度の嘔気とを訴えるようになったので、某医を訪れ再び回盲部に鶏卵大の腫瘤のあるのを指摘され、しかも腫瘤はむしろ増大する傾向があつたので当科に紹介されて来院した。

現 症：体格中等大，栄養良，顔面や蒼白，眼瞼結膜に軽度の貧血を認める。体温正常，脉搏75，整，緊張良好，腹部は平坦，左下腹部腹壁に瘻痕を認める。肝臓及び脾臓は触知せず，右下腹部に鶏卵大の卵円形の腫瘤を触れる。腫瘤は表面平滑，硬度は弾性硬で圧痛を認めるが，筋性防禦はない。又移動性も認められない。

検査成績：尿及び糞便には異常所見なく，血液所見では赤血球450×10<sup>4</sup>，白血球11,300，血色素82%，好中球81%，桿状核14%，分葉核67%，リンパ球17%，

単球2%，好酸球0%で好中球増多症を認める。その他心臓，肝臓，腎臓等の機能に異常を認めず，レントゲン検査では腸バリウム透視にて硬い腫瘍は回盲部に密着して移動性を欠き，回腸及び盲腸には通過障碍，陰影欠損等は認められない。

臨床診断：盲腸周囲膿瘍

手術所見：開腹すると回盲部には手拳大の腫瘍があつて，大網にて覆われている。大網切除を行なつてみると腫瘍は後腹膜と強く癒着し，盲腸壁は肥厚し且つもろく，S字状結腸も腫瘍の一部と癒着していた。これらの癒着を鈍的或いは鋭的に剝離を試みたが，剝離はきわめて困難であつた。結局腫瘍を含め回盲部の楔状切除を施行して回腸末端と上行結腸との間に端々吻合を行つて，腹壁を閉鎖した。

肉眼的所見：腫瘍は写真(1)，(2)及び図(1)，(2)に示す如く大網内に埋没した虫垂であつて，虫垂粘膜は肥厚しパウヒン氏弁近くから腫瘍が突出せるが如き観を呈し，大きさは小指頭大であり悪性腫瘍を思わせる所見であつた。又切除した盲腸及び回腸末端の壁はもろく肥厚していた。

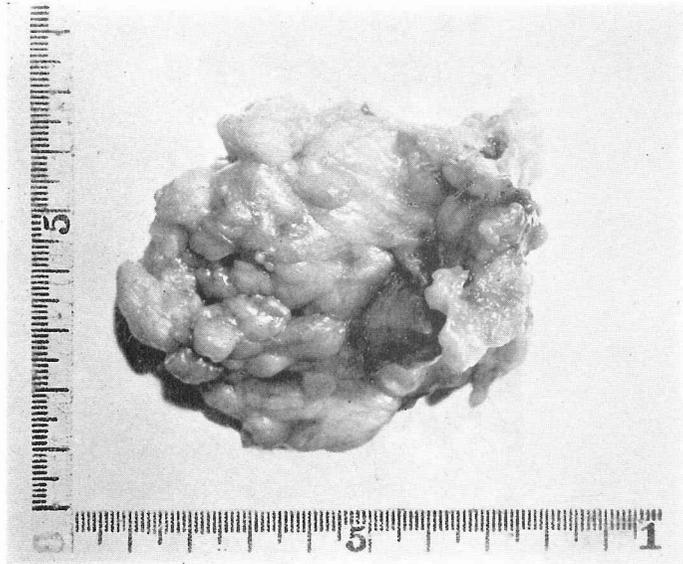
組織学的所見：写真(3)に示す如く肥厚した正常粘膜部に接して所謂成熟型腺癌の像がみられる。癌細胞は軽度の異型性を示し，核分裂像も僅かに認められ，外生的に乳頭状分岐を，内生的に腺管状発育を示す。粘液分泌もかなり認められ，極く一部に膠様癌の像もみられ，癌病巣は筋層迄発育してその先端部のリンパ球の浸潤は軽度である。粘膜下結合織は一般に増生しており組織学的には乳頭状腺癌の像である。

術後経過は順調で術後33日目退院した。術後3年6ヵ月を経過した今日再発の兆なく健在である。

## 考 按

虫垂に原発する癌は1882年 Beger<sup>①</sup>によりはじめに記載された。ところが Rolleston 等<sup>②</sup>が虫垂に原

写真(1) 表面



写真(2) 剖面

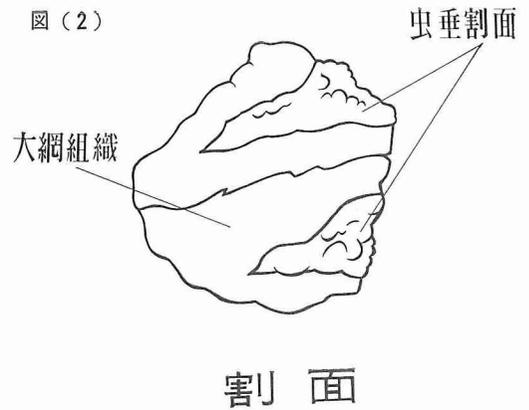
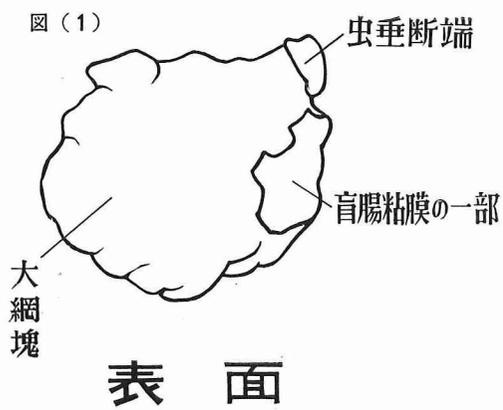
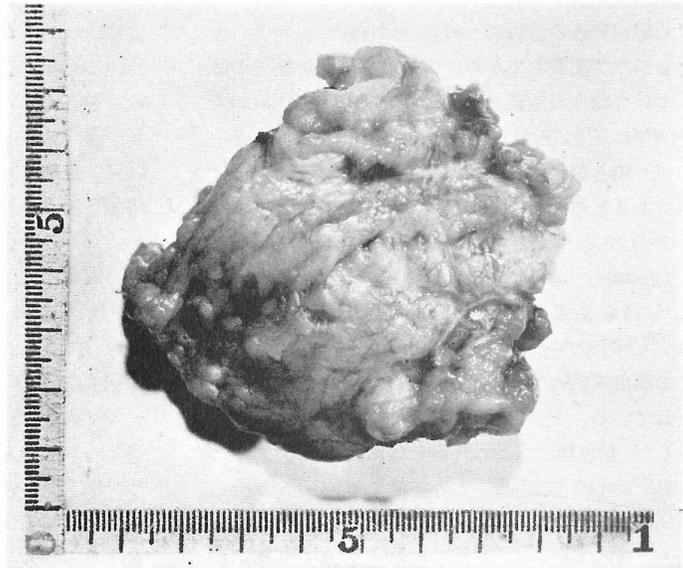


写真 (3)



発する銀親和性の腫瘍に carcinoid (類癌腫) という名称をつけて記載してから、虫垂の癌と類癌腫との区別について種々の論議がなされた。Mc Williams<sup>④</sup>は1908年にそれまでの文献例87例に自験例3例を追加して、癌と類癌腫との問題を論じ、両者の区別は困難であると述べている。Klotsは類癌腫は良性で予後が良好であつて癌とは異なると解釈しているが、Montgomery and Johnson<sup>⑤</sup>は類癌腫で転移を生ずるものもあると述べている。また Phillips and Isaac<sup>⑥</sup>は両者の間に移行がみられると主張している。今日では虫垂癌については次の如き分類法が一般に用いられている。すなわち Uihlein & Mc Donald<sup>⑦</sup>は、(1) 類癌腫型 (carcinoid type), (2) 嚢腫型 (cystic type) 又は腹膜偽粘液腫 (pseudomyxoma peritonei), (3) 結腸型 (colonic type) の3型に分類し、Niceberg<sup>⑧</sup>によれば類癌腫型は最も多いものであるが、主として虫垂の先端部に発育し、石灰化をともなう黄色の腫瘤として現われることが多く、境界が鮮明な場合と周囲に浸潤している場合とがあつて、発育は緩慢で転移は少なく悪性度は低いという。また腹膜偽粘液腫型は類癌腫型について多いもので転移を生ずることは少ない。結腸型といわれる腺癌は結腸癌に類似しリンパ行性及び血行性転移を起しやすく、悪性度は高いとされている。

頻度について Mc Donald<sup>⑦</sup>は1910~1941年の31年間に Mayo Clinic で144例の虫垂癌を経験しているが、そのうち127例(88.2%)が類癌腫型であり、12例(8.3%)は腹膜偽粘液腫型、5例(3.5%)が結腸型であつたという。Selinger<sup>⑨</sup>は全手術例45302例中

虫垂癌は34例(0.075%)で、虫垂切除例の0.35%に相当すると報告し、Fleming<sup>⑩</sup>は消化管癌の0.2~0.5%に虫垂癌を認め、Vance<sup>⑪</sup>は虫垂切除例の0.2~0.5%に認めているというから虫垂癌は稀なものである。著者の症例は丸田外科における最近8年間の虫垂切除例475例中の1例0.2%であつて、結腸型の癌であつた。

性別頻度では Niceberg<sup>⑧</sup>は男性に多くみられると述べているが、Rolleston は男女ほぼ同数であると報告している。

年令的には Niceberg は26才~79才にわたり、50才~70才代が一番多く、又40才以上が全体の80%を占めるといふ。一方 Rolleston は本症の平均年令は24才で、12才~70才にわたり、20才~30才代の比較的若年者にも稀ならずみられるという。著者の症例は77才の女性であつた。

Niceberg によれば49例の虫垂癌の術前診断は、急性虫垂炎29例、虫垂炎性膿瘍4例、結腸癌3例、慢性胆嚢炎2例、その他11例であつて60%以上が急性虫垂炎又はこれによる膿瘍と診断されている。著者の症例も回盲部の腫瘤、圧痛、発熱があり、白血球増多は認められなかつたが、好中球増多症を認めた為盲腸周囲膿瘍の疑で手術を行なつている。

治療に関しては、癌組織が虫垂粘膜を超えている時は虫垂切除及び右結腸半側切除術を、又癌組織が虫垂粘膜を超えていない時は虫垂切除のみで充分であると Niceberg は述べている。予後に関しては虫垂切除のみのものは26例中7例が再発死亡、虫垂切除及び右結腸半側切除のものは12例中1例が死亡し、一般に結腸

切除を併用した方が予後はよいと云う。

転移は他臓器の癌に比べて少なく、したがって悪性度も低い。Hilsaback<sup>⑩</sup>は1910~1949年間の Mayo Clinic における虫垂癌29例の全例にリンパ節転移を認めず、そのうち10例は5年以上生存していると報告している。著者の症例の場合もリンパ節転移を認めず腫瘍を完全に剔出したので、予後は良好で術後3年6カ月を経過した今日なお健在である。

### 結 語

著者は最近経験した虫垂腺癌の一例を報告し、併せて本症に関する分類、頻度、診断、治療、予後等について文献的考察を行なった。

### 文 献

- ①Beger, A.: Berlin. Klin. Wschr., 19: 616-618, 1882.   ②Rollestone, H. D. et al: Medchir. Trans., 89: 125-131, 1906.   ③Mc Williams, C. A.: Am. J. M. Sc., 13: 53-59, 1908.  
④Montgomery, J. C. and Johnson, E. F.: Missouri State. M. A., 28: 215-221, 1931.  
⑤Phillips, E. W. and Isaac, D. H.: Brit. M. J., 1: 1127-1130, 1930.   ⑥Uihlein, A. and Mc

- Donald, J. R.: Surg. Gyn. & Obst., 76: 711-714, 1943.   ⑦Niceberg, D. M.: Surg., 40: 560-570, 1956.   ⑧Selinger, J.: Ann. Surg., 89: 276-281, 1929.   ⑨Fleming, J. M.: Am. J. Surg., 86: 188-191, 1953.   ⑩Vance, C. A.: Am. J. Surg., 24: 854-862, 1934.   ⑪Hilsaback, T. R.: May. din., 28: 11, 1953.

### ABSTRACT

A rare case of carcinoma of the appendix was reported on this paper. The patient who is 77 years old female was admitted to the Prof. Maruta's surgical clinic because of fever and a mass in the right lower quadrant. The patient was operated on as the diagnosis of perityphilitic abscess. The operation revealed a tumor situated on the cecum including the appendix. A resection of ileo-cecal segment was performed. Pathological diagnosis was adenocarcinoma of the appendix. The patient is well 3 and a half years following the operation with no evidence of recurrence.